

# 王政復古期における非国教徒文学と社会

— ロバート・ワイルドと出版についての考察 —

高野美千代

Nonconformist Literature in the Restoration England:  
A Study of Robert Wild and Print Culture

TAKANNO Michiyo

## Abstract

Robert Wild (1615/16-1679) was among the seventeenth-century nonconformist writers who have been mostly ignored since early eighteenth century. A great number of his poems were published in the restoration England, which indicates the popularity of the poet. This study aims to study his poems published after 1660 and to consider the use of print by a nonconformist poet whose works were much read by his contemporaries.

キーワード：ロバート・ワイルド、非国教徒文学  
key words: Robert Wild, Nonconformist Literature

## はじめに

王政復古期英文学と言えば劇場の再開による戯曲の人気、古典主義的風刺詩の流行などが主に注目を集めてきた。1660年、清教徒によって閉鎖されてきた劇場をチャールズII世が再開させると、ふたたび芝居は市民の娯楽の一部となり、たとえばウィリアム・ウィッチャリーに代表される王政復古期風習喜劇作品群は新たな時代の息吹を象徴するものとなった。また、ジョン・ドライデン以降、古典主義が浸透し、均整の取れた詩文の中に風刺を込めた作品が一世を風靡する。王政復古期英文学はこういった都会的で洗練された作品に代表されてきた。くわえて、ジョン・ミルトンの叙事詩『パラダイス・ロスト』あるいはジョン・バニヤンのアレゴリー『天路歷程』のような、清教徒の手による宗教的作品も現代に至るまで高く評価されている。それ以外の英文学は実際のところ

ほとんど注目されてこなかったと言ってよいだろう。

だが意外にも、王政復古期の英国において、今では無名の非国教徒による文学作品が大人気を博していたのは事実である。ミルトンやバニヤン以外の非国教徒が著した印刷物の発行部数は膨大であった。ただし、そのほとんどが現在では忘れ去られているのである。本論考においては、これまで看過されてきた王政復古期非国教徒文学を取り上げ、17世紀後半のプリントカルチャーと非国教徒文学との関係の一端を明らかにしたい。1660年代から1700年頃までに、数万点の印刷物を世に出し、多くの市民の支持を受けていた小詩人群が存在したという事実にも光を当て、未だ研究が十分になされていない非国教徒文学の正当な評価の必要性を問うことが本研究の目的である。

---

山梨県立大学 国際政策学部 国際コミュニケーション学科

Department of International Studies and Communications, Faculty of Global Policy Management and Communications, Yamanashi Prefectural University

## 研究の背景

王政復古期非国教徒詩人の代表格と言えロバート・ワイルド (Robert Wild, 1615/16-79) の名前を挙げるができる。ワイルドは1660年に出版した作品 *Iter boreale* をきっかけにロンドンで一般大衆に爆発的な人気を博した長老派聖職者である。彼の主要な作品はブロードサイドなどの廉価の印刷物として流通し、人口に膾炙した。このことは1663年8月23日のサミュエル・ピープスの日記にも書かれている通りである。<sup>1)</sup> しかしワイルドの作品が大衆を惹きつけた期間は短いものであり、王政復古期には絶大な人気を誇ったにもかかわらず、18世紀以降彼に関する考察はほとんど行われていない。1870年に作品の一部を扱う詩集が聖職者ジョン・ハントによって編まれたものの、<sup>2)</sup> それ以降は2012年に非国教徒詩を扱うアンソロジー3巻本 (*English Nonconformist Poetry, 1660-1700*, ed. George Southcombe) が発刊されるのを待たねばならなかった。編者のジョージ・サウスコムは、ワイルドを含む非国教徒詩人の著作から重要な作品を選び、詳細な注釈を付した。このアンソロジーによって、ようやく王政復古期非国教徒文学に関心が向けられる可能性が世界的に広まったのである。とは言え、現時点では世界的にも体系的な研究は未だなされておらず、今後確立された成果の発表が待たれている。

1662年の礼拝統一法で国教に従わなかった長老派、クエイカー、バプテストなど様々な主張を持つこれらの詩人たちは、出版することによって思想的・宗教的な問いかけを社会に向けて発信した。18世紀以降、長い間忘れ去られてしまった彼らの声を、本研究においては17世紀英国社会・宗教・文学の正確な理解に不可欠な要素として考究し、再評価を試みる。これまで看過されてきた作家として、ロバート・ワイルドの同時代に著作活動をしたバプテストのベンジャミン・キーチやハーキュリーズ・コリンズ、クエイカーのジョン・パロットやマーティン・メイスンらの作品がサウスコムのアンソロジーに登場する。彼らは言論統制に直面しながらもプリント (出版) という手段を用いて世にメッセージを送り続けた非国教徒作

家たちである。しかしいずれの作家についても、現在までに十分な研究がなされたとは言えない。

書物史的観点から言えば、実際に出版された資料原本は現代の研究用テキストからは得られない情報を豊富に含有している。原史料からは、発行された印刷物の形状 (判やページ数) が反映する出版事情、出版者と著者の関係など、様々な情報が浮かび上がってくる。言い換えれば、実際の資料を調査することによって、作品の精読だけでは判明しない部分を知り、作品とその背景のより正確な分析が可能となる。本研究で取り上げる作品群は廉価の印刷物が主であり、多くの部数が世に出回り、読者の手に渡っていたものである。非国教徒による出版物ということもあって、検閲法をかいくぐって出版されたものもある。したがって異本 (あるいは海賊版) の種類は大変多い。つまり、たとえば Early English Books Online などのデータベースで日本国内にいながらにして確認・閲覧できるテキストは、全体の中の一部に限られることになる。<sup>3)</sup>

ロバート・ワイルドの代表作 *Iter boreale* の例を挙げれば、初版の1660年以降、74年までに15の異本が出版されている。当時の出版物の発行部数はおおよそ500 (から1000) 部と言われる。したがって、当時のロンドンでは少なくとも7千部以上の *Iter boreale* が流通していたことになる。そしてこれら異本は特徴を変え、大判になりページ数も増えていった。紙の価値が高かった時代であるため、ページ数が増えれば一冊の値段が上がり、購入者の中心は庶民から中流層へとシフトすることを意味する。具体的には *Iter boreale* の初版は3ペンス程度であり、1674年には (判とページ数から単純に判断しても) その2倍から3倍の値段になったことが推測される。読者層の変化も作品の背景や時代の主潮を知るひとつの鍵となる。プリントカルチャーに注目し、書物史的観点を盛り込むことによって、さらに詳細に文学と社会、文学と歴史・宗教の関係を解明することが可能となる。まず、ワイルドの作品を概観し、その執筆・出版の意図と背景を探る。それに続けて出版文化、出版事情の検討を行いたい。

### ロバート・ワイルドの *Iter boreale* について

ワイルドの代表作 *Iter boreale* は、はじめ 1660 年にクォート判 20 ページの冊子体で出版された。同じ題名の詩一編のみを含むものであった。それは、1650 年代から王政復古までの動きを記録した内容の叙事詩であり、具体的にはスコットランド駐留軍の司令官ジョージ・マンク将軍の功績を称えるものである。この“*Iter boreale*”というラテン語は、直訳すると“*northern journey*”すなわち「北の旅路」というべきだろうか。実際にはマンク将軍による、「北」つまりスコットランドから「南」ロンドンへの移動を指している。マンクは、チャールズ II 世を亡命先フランスから呼び戻し、英国を王政復古へと導いた立役者であった。長老派ワイルドにとって王政復古は大変喜ばしいものであり、自身の興奮を作品において表現したのと同時に、この作品は王政復古を歓迎する長老派教会のスタンスを広くアピールするものと考えることができよう。チャールズ II 世の英国への帰還を祝う意図は当然込められているのだが、あくまでもマンク将軍の行為を中心に賞賛するものであり、長老派に対して理解を示したマンク将軍へのさらなる期待が表現されている。

16 連で構成されるこの作品は叙事詩に特徴的なカプレット（2行連句）で書かれている。第 1 連では、暗い夜に喩えられる共和政時代がようやく終焉を迎え、詩人ワイルドがペンを執ることを再び決意したことが書かれる。ここでは王政復古の祝賀ムードが示唆されているが、長老派詩人のワイルドにとって王政復古は抑圧されていた共和政時代とは全く異なる、待ちに待った新しい時代の訪れであることは言うまでもない。つづく第 2 連でも、多くの聖職者が処刑された共和制時代において、ワイルドは哀悼の詩さえも自由に書けずその気持ち抑えてきたことがつづられる。つまりマンクがもたらした王政復古は、詩人にとっての夜明けを意味するものでもあったのである。

一方、2 連においては 17 世紀英国の革命期を代表する人物の名前が連なる。チャールズ I 世、ジョージ・マンク、そしてジョン・ランバート (John Lambert) である。チャールズは、「英国の父」と

されていて、争う 3 人の子達すなわちイングランド、スコットランド、アイルランドをなだめ、諍いを制止しようとするが成功せず、殺害されてしまう。マンクは、闇に包まれていた英国に再び朝の日の光をもたらしてくれた人とされる。そしてランバートは「暴君」とされている。彼はクロムウエルの死後、1658 年に政界に戻っていて、リチャード・クロムウエルの辞職後の 1659 年には国政を支配していた人物である。つづく第 3 連では、オリヴァー・クロムウエルの死後、1658 年息子のリチャード・クロムウエルが護国卿となったことが書かれている。リチャードは軍隊と議会との板ばさみになり、統制を取ることはできず、「7 年間のバベルの塔」が崩れ去ったとワイルドは表現している。ここでランバートの活動が始まるが、それは天下を取るためのハンティングに喩えられる。ランバートはハンティングの責任者 (Master of Hounds) として、「古き良き大義」、*“the Good Old Cause”*、という名の獲物を放し、猟犬を使って狩りを行う。「古き良き大義」とは革命初期オリヴァー・クロムウエルが活躍した頃から叫ばれたスローガンであったが、1659 年のこの段階に至っては、いわば軍隊の不満を集約して示すものであった。

第 4 連からはランバートが暗躍する混迷期のイギリスの様子が記されている。第 5 連でイングランドは病気を患う女性に喩えられ、国内には銃撃や砲撃の音が響く。助けを求めて悲鳴をあげる祖国の様子は、次のように描かれている。

Sick (as her heart can hold) the Nation lies,  
Filling each corner with her hideous cries;  
Sometimes Rage (like a burning Fever) heats,  
Anon Dispair brings cold and clammy Sweats;  
She cannot sleep, or if she doth she dreams  
Of Rapes, Thefts, Burnings, Blood, and direful  
Theams,  
Tosses from side to side, then by and by  
Her feet are laid there where the head did lie:  
None can come to her but bold Empiricks,  
Who never meant to cure her but try tricks:

Those very Doctors who should give her ease,  
(God help the Patient) was her worst disease.

イングランドは病に伏しているのだが、病気を治療する医師がいない。「病人を楽にさせてやるべき医者が／なんと一番の厄介な病気だった」というように、主導権を握ろうとする「やぶ医者」たちが暴れているこの体制のままでは、国がますます衰えていくという危機感が示唆されている。

第9連からはマンク将軍の具体的な動きが描写される。作品のタイトルに関連する北風の神ボレアスの息吹とともにマンクは活動を開始する。第10連ではマンク将軍の南下が始まる。マンクがロンドンに着いたのは1660年2月3日とされている。つづく第11連で詩人が言及するのは、1659年暮れに復活した残余議会が1660年2月21日に旧長老派議員を迎え、1648年12月のプライドのバージ以前の長期議会へ戻ったあと、国王を迎えるための新議会が召集される決定がなされて解散した時期のことであり、最終の2行では、議会が不死鳥のごとく自分の灰から蘇るよう整えられたと書かれている。こういった仕事が済んだ時点で、マンクはイングランドの守護聖人である聖ジョージに喩えられる。ジョージという名前も共通しているのだが、聖ジョージはドラゴンを退治して王女を救った英雄であり、ジョージ・マンクはランバートが中心となる勢力を破って、病に苦しむ女性に喩えられてきたイングランドを救出した英雄とされる。

作品のクライマックス部である第14連からの最終3連においては、チャールズII世の英国への帰還、そしてマンク将軍へのガーター勲の授与について示唆される。厳密に言えば作品自体は1660年4月23日、聖ジョージの祝日に出されているため、チャールズII世はまだイギリスに帰っておらず、王政復古もまだもう少し先のこととなる。ただ、詩人はすでにチャールズの帰還を極めて鮮明にイメージしている。そして、チャールズII世が海を渡って英国に戻るときのお祝いムードは、次のように誇張されユーモラスに描かれている。

The joyful ship shall dance, the Sea shall laugh,  
And loyal Fish their Masters health shall quaff;  
See how the Dolphins croud and thrust their large  
And scaly shoulders, to assist the Barge:  
The peaceful Kingfishers are met together  
About the Decks, and prophesie calm weather,  
Poor Crabbs and Lobsters are gone down to creep  
And search for Pearls and Jewels in the deep;  
And when they have the booty — crawl before,  
And leave them for his welcome to the Shore.

母国に帰還するチャールズを歓迎する船や海の生き物の様子は、作品の前半とは全く異なる軽快な調子で語られる。古典的な要素を感じさせるこの部分の陽気さには違和感を覚えるほどであるが、そこがワイルドらしさでもある。15連においては、エリザベス朝で大人気を博したペトラルカ風ソネットのように、チャールズを乗せた船を待ちきれない群衆は喜びの涙で海の水位を上げるだろうとか、彼の父親（チャールズI世）の墓に泳げるほどの涙を流そうなど、誇張表現が用いられている。この連は王政復古期の叙事詩というよりもむしろ一昔前の抒情詩あるいは賞賛詩といった趣である。

全体的には歴史的な記録を収めたものでありながらも、この作品の根底には、王政復古の兆とそれに伴う期待によって、詩人が再び筆を執ることを決意し、あらゆる抑圧から解放され自由に詩を書くことができるという確信が込められている。結末の部分の軽快さ、明るさも「一番陽気な詩神を選ぼう」という詩人の決意の表れと理解することができる。

前述したように、この作品は王政復古直前に印刷され、1660年の聖ジョージの記念日にロンドンで出版されている。出版者はロンドンの有名書籍商ジョージ・トマスンであった。トマスンはロンドン有数の書店街(St. Paul's Churchyard)に「薔薇と王冠(Rose and Crown)」という屋号の書店を持っていた。トマスンは1640年代から顕著に活動していた書籍商で、革命期のあらゆる文書、パンフレットを蒐集したことでよく知られてい

る。彼は宗教的には長老派を支持していた。トマスとワイルドを結ぶ人物はクリストファー・ラブである。ラブは1650年前後に王政復古を画策し、内密にチャールズII世やヘンリエッタ・マリアと通信を行ったとして1651年に捕らえられ、処刑された人物である。トマスはラブの事件に関わっているとされている。一方のワイルドはラブが処刑されるまでの一連の出来事をドラマ仕立てでつづった詩“The Tragedy of Mr. Christopher Love”を執筆、出版している。このようなことから、長老派詩人ワイルドによる *Iter boreale* がトマスの店から世に送り出されたのも宗教的關係によると推測される。

### 作品の出版事情

出版部数あるいは再版回数から判断して、ロバート・ワイルドに代表される非国教徒による作品は、王政復古期に大変な人気を博していた。しかしこれら詩人群は、18世紀になると徐々に忘れられていった。ワイルドの例を見れば、時事的な題材を扱っていたことが多く、それゆえに時の経過と共に作品が時代に合わないものとして人々の目に触れなくなったかもしれない。また、これは作品が広く一般に普及した理由とも考えられるが、語彙や表現において彼の作品は大衆的であったためもある。ワイルドは聖職者であり神学博士でもあったのだが、教義や信仰心を扱う宗教詩は書いていない。むしろユーモラスにあるいは皮肉たっぷりにタイムリーな題材を扱っていた。たとえば、同世代の清教徒詩人ミルトンと比べれば、作品の分量も少なくテーマも矮小である。しかしながら、ワイルド自身は *Iter Boreale* の最後の部分で、この王政復古を実現させたマンク将軍の功績を後世に伝えることが不可欠であるとアピールし、詩によってこの記念すべき歴史的瞬間の記録を残すことを長老派詩人としての一種の義務と認識していたことがうかがえる。また、同作品の冒頭で“The subject will excuse the verse, I trow, / The venison’s fat, although the crust be dough.”と宣言しているのは、彼自身が詩の技巧に秀でていないことを認めており、その一方で、扱う題材に

ついてむしろ自負していたことを示していよう。

*Iter boreale* は1660年、王政復古直前に出版された。共和政終焉の兆によって再び執筆に専念した詩人であるが、この作品は当時の重要な史実を記録したばかりでなく、一長老派聖職者の複雑な事情、心境をも鮮明に残している。共和政時代、1650年代になると多くの人々はクロムウェル政権に失望し、より自由な信仰を求めて王政復古を希求していた。

ワイルドは王政復古をきっかけに出版を行い、長老派詩人として国王を支持している立場を明らかに示したかったことが推測される。爆発的人気を得た *Iter boreale* はその役割を果たしたと言える。販売部数から判断して、一般市民への浸透は十分であったと言えよう。王政復古前後1年間に出版された王政復古を祝う詩は多数あって、チャールズII世に宛てて書かれたものだけでも150編ほどを数える。王政復古を扱う詩の中でもワイルドの人気は高いものであった。*Iter boreale* ははじめ匿名で(“Rural pen”として)出版された後、繰り返し形を変えながら世に出された。最初はクォート判20ページで作成され、出版同年の1660年だけでも数回の再版がなされた。そしてトマソン以外の書籍商もワイルドの本を扱うようになる。明らかにワイルドの声はロンドンの町に浸透していったと言える。王政復古の喜びと興奮を共有する市民が多かったことが推察できる。1661年にはオクテーヴォ判63ページのもが発行され、さらに1663年には初めて所収する作品も含めてオクテーヴォ70ページの印刷物となっている。1668年には増補版となって再度世に送り出され、ページは100を超える。1670年代になってもなお、少なくとも4種の *Iter boreale* が発行されている。*Iter boreale* の爆発的流行はワイルドを有名にした一方で検閲官の監視の目を集めることにもなった。レストランジとワイルドは直接的・間接的に対立することとなる。しかし、政治的には単純に作用するものではなかった。1662年には礼拝統一法が出され、長老派を含めて非国教徒は窮地へと追い込まれていく。それに加えて、同じ1662年には特許検閲法によって出版の規制が

かかることになる。しかしワイルドはペンによるアピールをその後も続けた。後期の作品においては特に検閲官 (Sir Roger L'Estrange) に向けられた攻撃も見受けられる。レストランジと非国教徒の対立はワイルドに限ったことではなく、非国教徒の宗教的戦いは暴力ではなく、むしろ印刷物によるものとなっていくのである。<sup>4)</sup>

### 1660年以降のブロードサイド作品

ワイルドが活発な執筆活動をしていた当時の大衆的な出版物には冊子のほかブロードサイド (あるいはブロードサイドバラッド) と呼ばれるものがあった。これはもともと廉価な印刷物で、一枚刷り、挿絵がある場合でも木版画、文字は中世風ゴシック体が主流であった。ブロードサイドには歌・民謡、物語、政治の風刺などがある。そもそも文字が読めない人にも楽しめるよう、音読されあるいは歌われたものであった。ワイルドが若いころ執筆したとされるバラッド “Alas poore Scholler, whither wilt thou goe” は、一枚刷りの印刷物である。節に合わせて歌われることを前提にしたもので、木版画の挿絵が添えられている。使われている活字はブロードサイドバラッドに典型的なブラックレターである。内容は自伝的要素を含んだ物語調となっている。一方、ワイルドが1660年以降に書いたブロードサイドにはゴシック体の活字や木版画のイラストレーションは使われなくなっている。文字がぎっしりと詰め込まれているそれらの印刷物は、もはや伝統的な歌・民謡の類ではなく、政治的・宗教的風刺へと目的を変えたことがわかる。

礼拝統一令が出された翌年の1663年、ワイルドはブロードサイド1枚刷りで風刺詩 “The Recantation of a Penitent Proteus or the Changeling” を出版している。このブロードサイドは、元長老派司祭のリチャード・リーが時代の潮流に乗るため教会を節操なく渡り歩くさまを皮肉った内容となっている。リーはもともとワイルドと同じ長老派の聖職者であり、共和制下において複数の聖職録を持ち、マンク将軍のチャプレンを務めるなど引き立てられた人物である。彼は、礼拝統一令を

受けて国教会に改宗している。しかも、長老派としての過去を恥じ、チャールズ一世の処刑に心を痛めたと公言するような人物であった。礼拝統一令に従わず国教会から追放されてしまったワイルドは、この作品によって彼を糾弾したのである。ブロードサイドの価格は1ペニーほどであったため、庶民が簡単に目にすることが可能な読み物であった。出版者は不明であるが、このブロードサイドは1663年のうちに数種のヴァリエント (異本) が出回っていることから、人々の関心は高いものであったことがうかがえる。のちにはワイルドの詩集 (タイトルは *Iter boreale*) に収められ、1674年までの間に7回出版されている。

このあとワイルドが発表した作品は、ブロードサイド判による “An Essay Upon the late Victory obtained by His Royal Highness the Duke of York, Against the Dutch, upon June 3. 1665” であった。この作品は、題名からも明白であるように、ヨーク公が英蘭戦争において勝利を収めたことを記念する内容である。著者名は “the Author of *Iter Boreale*” としている。当時英国はオランダの海上交易や植民地における勢力の拡大を阻止するために英蘭戦争を展開していたが、1665年6月ローストフト海戦での大勝利を受け、ワイルドはすかさず作品を描いている。ヨーク公 (のちのジェームズ二世) はイングランド艦隊を率いてこの戦いの際に臨んでいた。ブロードサイドは4種出版されていて、そのうち1つはエジンバラでリプリントされたものである。スコットランドにおいても英蘭戦争への関心が高かったことがうかがえる。また、別の1つは北イングランドのヨークの書籍商 Stephen Bulkley による。いずれも1665年の出版であることから、いわば新聞あるいはかわら版的にニュース価値を持つ印刷物として人気の高いものであったと考えることができる。しかもこれはレストランジの検閲を経て出版されているし、ヨークの書籍商 Bulkley は王党派であった。つまり思想的にも中庸で危険性がないと判断されたものである。そしてこの作品は同年中には詩集 *Iter boreale* に収録されている。ワイルドらしい機知に富んだ作風で、海戦の勝利を自身の病気 (痛風)

の治癒に結びつく喜ばしいことと書き、オランダの敗北を軽快な笑いの要素を交えて紹介する。

Thou'rt not th'old Loyal Gout, but com'st from  
France.  
'Tis done, my grief obeys the Sovereign Charms,  
I feel a Bonfire in my joints, which warms  
And thaws the frozen jelly; I am grown  
Twenty years younger; victory hath done  
What puzzled Physic: Give the Dutch a Rout,  
Probatum est, 'twill cure an English Gout.

長老派として国教会を追われた聖職者であるが、ロイヤリスト（アングリカン）と同じ喜びを共有し、ユーモアにあふれた調子でローストフト海戦勝利をうたっている。ワイルドとしてはこの作品を通して自身の立場を明確に表したと言えよう。

同じ年の1665年にワイルドは“The Grateful Non-Conformist”（副題が Or, A Return of Thanks to Sir John Baber Knight, and Doctor of Physick who sent the Author Ten Crowns”）と題する作品をブロードサイドで出版している。ジョン・ベイバーは国王付きの医師であった。王政復古に尽力したことにより長老派の聖職者らの推薦を受け、その職を得たという経緯もあり、国王に近い位置にありつつも非国教徒に対して深い理解を示し、たびたび国王側との仲介役を担った。風刺を込めたこのブロードサイドは、ローストフト海戦を扱う前作と同様にロンドンに加えてエジンバラでも出版されている。スコットランドはそもそも長老派が中心の地域であったため、このような作品が流通したのはさほど不思議ではないのだが、ワイルドの詩の受容の範囲がイングランドにとどまらなかったことを裏付けるものである。

You are a daring knight thus to be kind.  
If trusted Roger gets it in the wind  
He'll smell a plot, a Presbyterian plot.

ここに登場する“Roger”は検閲官のロジャー・レストランジのことである。レストランジが、ベイ

バーと長老派が接近することを警戒していることが示唆されている。

1666年には再びワイルドのブロードサイドが世に出される。“The Loyal Nonconformist; OR, An Account of what he dare swear, and what not”というタイトルのこの作品は、まさにワイルドの複雑な宗教的立場、心境を綴ったものである。国王に忠実でありながらも、教会に関しては譲れない部分があると詩人は率直に述べている。王政復古期の非国教徒特有の心情である。

I never will endeavor Alteration  
Of Monarchy, or of that Royal name,  
Which God hath chosen to command this Nation,  
But will maintain his Person, Crown, & Fame:

What he commands, if Conscience say not nay  
(For Conscience is a greater King than he),  
For Conscience-sake, not Fear, I will obey;  
And if not Active, Passive I will be.

このブロードサイドが出版された1666年はロンドンの大火の年であり、これが同じ判で再版されることはなかった。ロンドンの大火では当時のロンドンの中心的書籍街であった聖ポール寺院界隈は甚大な被害を受けたのである。ワイルドは約2年間沈黙を守っていたが、町の再建を進めたロンドン市長を称える作品をその後出版した。それが“Upon the Rebuilding the City”（1669年）というブロードサイドである。翌1670年にはクォート判4ページで出版されている。当時の市長はSir William Turnerであり、非国教徒に理解を示す彼に対してワイルドは同年の市長選での再選を願っていた。詩人にとってみれば権力を持つ人物から非国教徒に対する保護を得続けたいと思っていたことが推測できる。結果的にはTurnerは再選がかなわず、市長から退くことになった。これらのブロードサイドは出版を重ね、あるいはのちに詩集に収められるなどし、形を変えながらも多くの読者を得続けた。

## むすび

長老派詩人で1662年に追放された聖職者であったロバート・ワイルドが自身の作品を長老派としての宗教的アピールに使用したのは明らかである。王政復古を迎える瞬間にその期待と喜びを露わにする *Iter boreale* を世に出し、チャールズ II 世の治世で長老派が相応の待遇を得られるように主張して見せた。1662年、礼拝統一令で追放されてしまった後もワイルドは執筆活動を続け、非国教徒の声をプリントによって世に伝えることをやめなかった。ただし、本論ではカバーできなかった長老派以外の非国教徒詩人群を考察の対象に広げることで、非国教徒とプリントカルチャーの関係をより正確に捉えることが可能となろう。

詩集 *Iter boreale* は1674年までの間に30種以上のヴァリエーションが印刷された。ESTCによれば1716年にロンドンで出版されたものが最後である。ワイルドの作品が政治的な効果を持つものとして使用されたのは恐らくここまでであり、その後1870年にジョン・ハントが彼の詩集を発表するまでは、そしてさらにその140年後にサムコムがアンソロジーを出版するまでワイルドの作品の本来の価値が見直されることはなかった。王政復古期という時代の全体像を正確に理解するために、当時大変な人気を博したワイルドをはじめとする非国教徒詩人群の作品を深く掘り下げることは必須である。今後の英文学・英国史研究の一課題とすることができよう。

## 注

- 1) ピープスは王政復古期の日常を1660年から1669年まで綴った日記の作者としてよく知られている。ワイルドの作品を読んだ時のことについては次のように書いている。“To church again, and so home to my wife; and with her read ‘Iter Boreale,’ a poem, made just at the King’s coming home; but I never read it before, and now like it pretty well, but not so as it was cried up”. (1663年8月23日)
- 2) ジョン・ハントによる詩集 *Poems by Robert Wilde; with a historical and biographical preface and notes by John Hunt* (London: Strahan, 1870) には、ワイルドによる主要な作品が含まれている。ハントは英国国教会司祭で、ワイルドの詩集を編んだ頃は Strahan 社の『コンテンポ

ラリー・レヴュー』誌のスタッフを務めるなどし、宗教的哲学的文書の著作を行っていた。詩集はワイルドゆかりの地であるハンティンドンシャ、セントアイヴズの初代市長となったリード・アダムズに献上されている。

- 3) なお、この論考を執筆するにあたり、English Short Title Catalogue (British Library ウェブサイト)、English Broadside Ballad (<http://ebba.english.ucsb.edu/>)、Early English Books Online などを利用した。
- 4) 『天路歷程』の著者であるジョン・バニヤンも、著書の『聖戦』(The Holy War, 1682) において、悪書のみ出版を許可する Mr. Filth をレストランジと重ね合わせて批判している。

## 主要参考文献

### 一次資料

- Hunt, John, ed. *Poems by Robert Wilde*. Edited by John Hunt. London: Strahan, 1870.
- Southcombe, George, ed. *English Nonconformist Poetry, 1660-1700*. 3 vols. London: Pickering and Chatto, 2012.

### 二次資料

- David Stoker, ‘Thomason, George (c.1602–1666)’, Oxford Dictionary of National Biography, Oxford University Press, 2004; online edn, Oct 2008  
[<http://www.oxforddnb.com/view/article/27250>, accessed 10 Dec 2015]
- Greaves, Richard L. *Deliver Us from Evil: The Radical Underground in Britain, 1660-1663*. Oxford: Oxford UP, 1986.
- . ‘Wild, Robert (1615/16–1679)’, Oxford Dictionary of National Biography, Oxford University Press, 2004; online edn, Jan 2008  
[<http://www.oxforddnb.com/view/article/29395>, accessed 10 Dec 2015]
- Keeble, N.H. *The Restoration: England in the 1660s*. London: Wiley Blackwell, 2002.
- Kitchin, George. *Sir Roger L'Estrange: A Contribution to the History of the Press in the Seventeenth Century*. London: Kegan Paul, 1913.
- Raymond, Joan. *Pamphlets and Pamphleteering in Early Modern Britain*. Cambridge: Cambridge UP, 2003.
- Southcombe, George. *Restoration Politics, Religion and Culture: Britain and Ireland, 1660-1714*. Basingstoke: Palgrave Macmillan, 2009.
- — . ‘“A Prophet and a Poet Both!”: Nonconformist Culture and the Literary Afterlives of Robert Wild’, *Huntington Library Quarterly*, 73 (2010), 249-62.
- Takano, Michiyo. “The Satirical Nonconformist Poet of

Restoration England: A Revaluation of Robert Wild”

*Eibeibunka*, 35 (2005), 23-34

Viles, David R. *The Revd Dr Robert Wilde*. Huntingdon,  
Cams.: Westmeare Publications, 2003.

Wood, Anthony. *Athenae Oxonienses*. Oxford, 1690-91.